未来少年少女物語

ビクトリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来少年少女物語

【Ｎコード】
Ｎ３３９５Ｙ

【作者名】
ビクトリーム

【あらすじ】
もし超鈴音に協力者がいたら。これはそんなｉｆの物語。

第零話　事の始まりは（前書き）

本来の方が行き詰ったために、完結を目的として描く練習長編であります。

第零話　事の始まりは

「あやー、偵察機破壊。気付かれました」
「流石ネ。対魔法使いのステルスは完璧だと思ていたガ」
「追手が来てるみたいだが、どうする？」
「フム……とりあえず私が囮になるヨ。ハカセはステルス迷彩かけてここに隠れてるネ」
「大丈夫ですかー？」
「任せとくネ。着いて、来てくれるのだろウ」
「まぁそれくらいは構わねぇさ」

◇　◇　◇

石畳を叩き二つの人影が雑踏を抜ける。

「大丈夫なのかネ？」
「何が」
「それは追手のことヨ」
「さぁ。俺にはわかんねぇ」

問いかけるような少女の声に、頭一つ背の高い少年は軽く答えた。
頭からローブをすっぽりとかぶる二人に、雑踏は見向きもしない。
自分たちの仕事に、そして明日から始まる大イベントに気が向いているからだ。ローブをかぶった程度のコスプレはいたる所にいる。

「距離はどれくらイ？」
「知らねぇよ」
「わーお、『だいぴんち』というやつダ」
「ハハッ、しらじらし過ぎる」

起伏なく飛び込んできた言葉に乾いた笑いを一つ、微かに少年は足を速めた。自然と少女は肩を並べる。カツンと一つ、二人の靴とは別に地面が叩かれた。

「いタ。さてはて、か弱い少女は正義感溢れる優秀な先生に助けを求めることにするカ」

人混みの先に目的の人物を見つけた少女はにかりと微笑んで見せた。小走りに駆ける少女を見つめるように、少年は前を向く。少女が見つける遥か前から気付いていた大きく純粋な魔力。それが人型となり、小さな魔力の中を悠々と闊歩している。両隣りには鋭い気の人型と烈しい気の人型が付いている。

「ああ、二回目の会合か……ネギ・スプリングフィールドか」

少年は気だるそうに、重くゆっくりと、ようやくその言葉を吐きだした。

□

「あれ、超さ――」

「やふーだ、ネギ坊主。止まらなく歩きながら私の話を聞いてくれないだろうカ」

ローブを脱いでお団子頭を晒した少女――超鈴音は、赤毛の少年――ネギ・スプリングフィールドの言葉を遮るように声を被せた。

「実は私……悪い魔法使いに追われているのネ！」

「ええっ！」

オーバーリアクションにオーバーリアクションで返され、若干満足げな超。あわわわと超の顔、周囲、超の顔、周囲と視線を行き来させるネギ。中々と再起動しないネギに対して、傍らにいた黒髪の少年少女――犬上小太郎と桜咲刹那はピクリと感覚に引っかかるものを感じていた。

「確かに何か近付いてきとるヤツらがおるな。数は４と、式神みたいなヤツらがいくつか」

「居場所に気付いているのは……後ろの彼でしょうか」

刹那の言葉にキリと顔を引き締め、ネギは後ろを向いた。隣で全身に気を纏わせた二人と同じよう、いつでも応戦出来る姿勢を作ったままに、だ。

視線の先にいるのは頭まですっぽりローブを着込んた少年だった。手には一本の杖を持ち、足の行く先行く先を叩きながらネギたちの方へと歩いてきた。

練習用の杖をきつく握り、ネギは警戒心を隠すことなく問いかけた。

「あなたが、超さんを……僕の生徒を襲おうとする悪い魔法使いなんです――」

「剣峰、遅かったネ」
「走るお前が悪い」
再びネギの言葉に超は言葉を被せる。剣峰と呼ばれた人物はローブの頭巾を脱ぐ。ネギの視界に入ったのは深々と、顔の上半分を隠すように灰色の布製丸縁帽子を被った少年だった。空いた口をパクパク、ネギはシュンと小さくなった。
「そいえば鈴音、逃げなくていいのか？　って、もう来たみたいだが」
「あいやー」
ポンと肩を叩く大人の手に、超は大げさに頭を抱えて見せた。

□

「記憶を消すって……それはどーゆー意味ですか！」
「そのままの意味だよ、ネギ先生」
むぅと膨れるネギに色黒の魔法先生――ガンドルフィーニは捕えられた超を見て告げた。両脇を固めているのは仮面をかぶった影法師。ガンドルフィーニの脇に控える金髪の魔法生徒――高音・Ｄ・グッドマンにより生みだされた魔法の産物だ。
「我々魔法使いは現代社会と平和裏に共存するために、魔法という神秘の力を公にしていないことを知っているね。そしてそれを知ら

れた場合、記憶を消し、今までと変わらない生活に戻すということも」
「それは……知っています、けど」
ふっとネギの頭に過るのは、麻帆良を訪れた初めての日。魔法をうっかりとばらしてしまった同居人の記憶を消そうとしたことだ。自分も行おうとしていた。ネギの口から否定の言葉は外に出られなかった。
「もっとも超君達、そこの黄君を含めた幾人かはとある事情により多少の情報をリークすることが許されている」
次に視線は丸縁帽子をかぶり杖を付いた少年――黄剣峰（ホアンチャンフォン）に視線を向ける。彼の後ろには箒を持った魔法少女――佐倉愛衣がちょこんと立っていた。
「だがね、それは全てを教えて構わないという訳ではなく、全てを覗き見て構わないという訳でもない。麻帆良という魔法使いたちの組織の中で、生徒はもちろん、教師といってもまだ日の浅いネギくんは中核にはない……というのは、理解出来るかい？」
「……はい」
「結構だ。では超君、校則を破れば普通の生徒も罰を受ける。君が我々の警告を無視したのはこれで3度目だね」
「アイ、まぁそうなるネ」
「警告を三度無視したからには見つかれば罰を与えなければならない。黄君もそれは理解しているね」
「それなりに、まっとうな辺りでは」
へらりと覗く口元を微笑ませ、黄はガンドルフィーニに答えた。
拘束される二人の正面で、ネギは難しげに顔を歪めている。隣の

小太郎は気に喰わなそうに鼻を鳴らし、刹那は仕方ない、といった雰囲気だ。

「そう言えばネギ先生、貴方こそ大丈夫なんですの？　なんでも幾人かに魔法をバラした、という噂を耳にしたのですが」

完全に零れそうだった言葉を高音に押しかえされて、ネギは消沈する。実際彼はもう何人にも、魔法使いの掟を破り魔法をバラしていた。

――夢が壊れてしまう。そんな思考がネギの頭に沸き上がるが、幼い少年らしく、燃え広がっていた目先の感情が音となり、再び閉じられた口を押し流した。

「でも、嫌がっている人の記憶を消すのは……僕は魔法使いとして正しくないと思います」

「超君も、超君の傍らにいることの多い黄君も、危険人物なんだ。仕方ないとするしかないさ」

感情の拘束は更に緩くなる。

「それにあの凶悪犯、エヴァンジェリンにも力を貸しているのだからね」

そしてその言葉で、拘束は完全に引きちぎれた。

「3―Aの生徒に勝手に手を出さないでください！」

真っ直ぐな目がガンドルフィーニへと重なる。

「凶悪犯とか危険人物とか、僕の生徒を勝手に決めつけないでくだ

さい。僕に全部任せてください」

周りの視線がぐるりネギに集中する。だがネギは怯むことなく、真っ直ぐと立ってみせた。

その姿にガンドルフィーニは微かに口元を緩ませた。

□

「いやー助かたネ。ホントにネギ坊主は私の命の恩人ヨ」

「俺も悪いね。坊主の生徒でもねぇのに助けて貰っちゃってさ」

「いえ、そんな大げさですよ」

手を握る超と丸縁帽子に隠れて眼は見えないが笑っている様子の黄の言葉に、ネギは照れるように頭をかく。だが直ぐに先生のような顔になり、ほんのり方を膨らませてぴっと指を立てた。

「でも危険人物扱いなんて何をしたんですか？　ちゃんと教えてくれないとダメですよ、僕には責任がありますから」

「フフフ、それはヒミツだネ」

意味深に笑う超。

「それより何かお困り事がないカ？」

そしてすぐさま話題を転換させた。

「恩に報いるためにネギ坊主の悩みを一つだけ解決してあげるヨ。この超鈴音の科学の力でネ！」

悪戯っぽい笑みで転換を定着させる。一拍置き、首を傾げて悩みだしたネギの姿に、超は笑みを深くする。

チャンスは鳥のようなものだ。飛び去らないうちに捕らえなければならない。傍らで好戦的な視線と、探るような視線をどこ吹く風で流す幼馴染を見ながら、白い翼を掴んだと、超は確信した。

第一話　少年は純粋に出会い

大きな魔力が四つ。……あぁ、あの坊主の魔力。ってことはしっかり使っている訳か。

それはそれは、良い事だ。

何よりと、道が潰せる。思考が一つ、逃げ道が一つ潰せる。

だがこのやり方に、どうとももやもやしたモノがこのやり方に浮かぶのは、何の影響なのか。

「ま……どっちでも良いわ」

カツカツと杖が地面を叩く。行き馴れたいつもの道。何ぶん麻帆良祭初日で雑踏は煩わしいが、それもまた祭りの醍醐味として許容しよう。

せっかくの日を、不機嫌顔で練り歩くのは馬鹿な話だ。

とはいえ幾分と、いつもより労力を使う。全盲の俺には少し辛い。鈴音か、知り合いの誰かでもいれば良かったんだが……。

鈴音はやることがある。古は予定びっしりと聞いた。ハカセは鈴音の手伝いだ。五月が店番してる店舗に行こうというのに、あいつがここにいる訳がない。茶々丸にも用事がある。エヴァが俺の手を引いてくれるとは思えない。チャチャゼロでもいれば……暇潰しにはなったか。

別段呼び出して、俺を障害者として、丁寧に扱って欲しいとは思わねぇから。

ま、ゆっくりと行けって事かねぇ。

「やっほ、黄くん。一人で何やってんの？」

あぁ、こりゃどうも両手に花で行けるみたいだわ。

□

蒸籠や皿に乗っかり目の前に並ぶ中華料理の数々。くぴりと烏龍茶を一口、黄くんは布でできた丸縁帽子を目深に被ったまま首を傾げた。

「喰わねぇの？　連れて来てもらったお礼だし、遠慮なく喰ってもらって構わねぇんだが」
「うん、ありがと。でも良いの？」
「良いんだよ。オーナーの意向で俺の飯代は全部タダだからさ」

何だろね、コレ。金で面を張りに来てんだろか？　でも幾ら美味しい超包子だからって、学生の手が届くくらいのリーズナブルなお値段だし……考え過ぎかな。

『ふわぁ、私も食べたいですよぉ』
「幽霊が憑依できる寄り代ってのがあるらしいな。どっかから調達してもらえりゃ、飯も喰えるんじゃねぇの」
『ホントですか！』
「多分。俺は詳しくねぇから、他の人にでも聞くのが一番だと思うがな」

ふわふわと浮かぶ幽霊――相坂さよちゃんに話しかけるのは黄剣峰くん。中国からの留学生で、超りんの幼馴染なんだっけ。ウチのクラスでも『超りんに彼氏が出来た！』って、一時期はすごい噂に

なってたわ。
まぁ記者たる私が見た感じ、友達以上恋人未満ってところが一番二人に当てはまる関係ぽいっけどね。
彼は確か麻帆良の養学校に通ってたはず。こっちにも麻帆良は力を入れてるみたい。でもちょいちょい超包子に顔出してたし、超りんや古なんかと一緒にいるところもよく見るから、ウチのクラスに顔は売れてたっけ。
……って思考が逸れたわ。

「妙な視線向けねぇで欲しいわ」
「んな事、無理だってわかって言ってるでしょ絶対。黄くんて以外に性格悪いわよね」
「別にそんなつもりで言った訳でもねぇんだがなぁ」

海老焼売を一口、かりかりと丸縁帽子の上から頭をかく。
んーむ……でもま、腹芸するタイプじゃなさそうだし、今の様子が狢を使ってるとは思えないし。
何を悩んでるかって、今私は超りんから提案を受けてるのさ。何でもでっかいことを麻帆良祭の期間中に計画してるみたいで、それに一枚かんでくれないかって話をさ。
もちろん面白そうだし、特等席ででっかいことを見れる！　ってのは良い感じな話なんだけど……ホラ、朝倉和美おねーさんは優しいから。ネギくんに関わることっぽいし、かわいいマスコットをいじめるってのは趣味じゃないからなぁ、って思ってさ。

「ま、俺はどっちでも良いさ。代わりはいくらでもいる訳だし」

と、思ってたら口を開く。
……あっそ、そうくる。うわー、何か非常に乗せられてるっぽいけど、カチンとくるわ。

「朝倉の好きに、好きにしたらいいと思うわ。誰のアナウンスでも、んなに対して変わらんからな」

そう言ってカツカツ、杖を手に黄くんは席を立つ。残された私とさよちゃん、それと少し冷め出したさっちゃんの料理。海老焼売を放り込んで……美味い！

「利用されるだけの私じゃないさ。世界中のことも、超りんのことも、全部暴いてやるから覚悟しときなって！」

□

ドカっと轟音が小さな筒から弾き出る。

「お前はもうちょっとスマートに事を運べねぇのか？」

「十分にスマートだろ？」

「うるさいんだが」

「この音の良さがわからないとは……まだまだだね」

筒に取り付いたスコープから顔を外し、ふふんと褐色肌の少女は笑う。

シュボっと口にくわえた煙草に火を付ける。

「煙草を吸うとか、現代人としてどうかと思うよ」

「煙草も吸えねぇとか傭兵としてどうなんだ？」

「喫煙者は年々と減っているんだが」
「この美味さがわからんとは……まだまだだわ」

口から煙を吐きだして、ははっと黄は笑う。
缶コーヒーを一つ投げる。冷たいそれは張り詰めていた少女の雰囲気を僅かに和らげた。

「今年は多いみたいだな」
「まぁ世界中の噂がどんどんと広がっているみたいだからね」
「女は好きだねぇ」
「それが女ってモノだよ」

少し甘い味が口いっぱいに広がる。

「何その全世界の女代表発言」
「良いだろう、私だって女なんだから」
「ケケケ、処女のくせによく言うわ」
「大事に守ってると言って欲しいね」

処女、もとい少女――龍宮真名は軽口を叩く黄にもう一度微笑んで見せた。

「そう言えば昨日、ウチの先生と接触したみたいだが。私の雇い主は何を考えているんだろうね」
「さぁ？」
「呆けるのかい」
「聞かされてないもんで」

とぼけた顔を向ける黄を尻目に、真名は石造りの壁に背を預けた。
床に腰をおろして丸縁帽子を手で弄ぶ黄を正面に、もう一口コーヒ

ーを流し込む。

「そいえばお前は良いのか」

「？」

「部活の先輩への告白。今なら愛の奴隷に出来るじゃねぇの」

ごぽっと妙な音が辺りに聞こえる。気道に入り、むせかえる自分を気合で抑え込み、ずいと真名は黄に詰め寄った。赤から噴き出す茶色い白が、真名の鼻孔をつんと刺激した。

「なんでそうなる」

「え、好きなんじゃねかったっけ？」

「だから――」

「他人と知りつつ亡き想い人の影を追って、せめても側に……なんざカワイイと思うぞ」

「撃ち殺すぞ貴様」

「ジョーク、冗談、玩笑。しかも突き付けてんのはナイフじゃねぇか」

ひたひたと頬に添えられた冷たい鉄に、両手を上げて降伏のポーズを取る。そのままペシリと右を叩き、真名は踵を返して設置した銃の近くに歩み寄った。

――命日で、気分が沈んでいたとはいえ話すべきではなかった。酒に酔って迫り痴った頭になった過去の自分を殴りたくなる真名であった。

「……ん、あれは……。ふむ、少し御暇するよ」

振り返ればにやにやと笑っているであろう黄。そんな空間が少し居た堪れなく、真名は空に近い塔からとんと飛び出した。そして手

に持った告白度チェッカーなるものをけたたましい音で鳴らしながら、再びと戻って来た。
そしてボルトアクションの後三連射。
「龍宮さん、こんなやり方ダメですよっ！　……って黄さん！　煙草なんて吸っちゃダメじゃないですか！」
追いかけるように飛び込んで来た真名の担任教師は、目深に丸縁帽子を被った黄の口から煙草を取り上げて、こんこんと人の道を説いている。
はい、はいと反論するでもなく頷く黄に、真名は自分の頬が緩んでいるのを感じていた。

□

「にぃちゃん、アンタは強い！」
「おぉ、さんきゅ」
「そうなの、カモくん？」
「あぁ、俺っちのオコジョセンサーが反応するくれーには強いですぜ兄貴」
ぎりっと拳を握る小太郎に、軽く笑い黄は言葉を返す。
値踏みするように見つめるオコジョ――アルベール・カモミールは、兄貴分と慕うネギに頷いた。
「その杖、仕込みやろ」

「さぁ」
「まったくなんか？」
「まったくだな」
「くぅぅっ！　血が滾るで！」

ぶんぶんと腕を振る小太郎にネギははてと首を傾げる。目の前の少年――黄剣峰にあったのはこれで三度目だ。一度目は修学旅行の前の街にて。超と古と一緒に買い物をしていたところに立ち合った。二度目は昨日、魔法に関わっていたということを知った。

「まったくって、何がですか？」
「目が見えないんだよ、コイツは」

ターンと遠くの告白生徒を撃ち抜き、真名はあっけらかんと答える。

現在学園からの依頼を受けてパトロール中の三人とおまけが一人と一匹。何でも今年は麻帆良のシンボルでもある世界樹が発光現象を引き起こし、世界樹周辺での告白率が１２０％に至るという状況を引き起こしていた。何でも２２年周期で起こるらしく、世界樹に集まる膨大な魔力が人の感情に影響を与える、ということらしい。

人の心を永久に操ってしまう、というのは麻帆良に住まう魔法使いたちの本義に反するらしく、こうしてパトロールを行う次第となっていた。

「ええっ！」
「言ってなかったのか？」
「言うほどでもねぇと思ってな」
「そんな事ないですよ！　一大事ですよそれは！」

あわあわと慌てるネギ。そんな様子にポンと黄は肩に手を置いた。

「気にすんな。俺がいいんだ、普通にしててくれりゃいい」
「でっ、でも……」
「何より俺はそう扱われるのがあんま好きじゃない。それなりに、そんなもんだと思って、坊主なりの態度で接してくれや」
「……はい。でも、何かあったら僕にすぐ言って下さいね！」
「ネギ、お前絶対わかっとらんやろ」

小太郎の言葉にむぅと膨れるネギ。じゃれあう二人の後を追いながら、黄は真名と並び歩く。

「……なぁ、お前は坊主についてどう思う？」
「おや、人の印象を誰かに尋ねるなんて珍しいじゃないか」
「いいじゃねぇか、偶には。で、龍宮大先生のご意見は？」
「偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）を目指すだけある、楓や刹那が肩入れするだけはある真っ直ぐな少年だと思うよ」
「そう……か」

黄は見えない視界にネギをしっかりと収めた。

「そうか」

そして先程真名に見せたものよりも更に深く、微笑んで見せた。

第二話　純粋に触れ

「随分と集まってるじゃねぇの」
「ウム、計画通りだヨ。ここが始まりと、基盤となル」
「本質バレまでの時間稼ぎと、知らしめた時にあぁそう言えば、って思わせるためか。セコい」
「堅実と言て欲しいネ。ここでの二年と、向こうでの数年を水泡に帰したくはなイ」
「そうか……うん、まぁそうだな。無駄にすんのはもったいないわな」
「気分が乗らないのカ？」
「そうだったらここに来させてねぇよ。感慨に耽ってるだけ」
「フフッ、そうカ」
「そうだ」
「剣峰」
「んだ、鈴音」
「今日は満月ダ」
「きっとそりゃ……月が綺麗なんだろうな」
「あぁ、とても、とても、綺麗だ（くー）……」
「ここで腹の虫とか、昔からどっかお前は抜けてるな」
「……うるさいヨ」

□

まほら武道会。古くから麻帆良祭で連綿と続く歴史ある大会であ

るが、現在は他の大掛かりなイベントにより日陰に追いやられていた。賞金１０万円程度。他ならばともかく、この麻帆良の地では限りなく小規模なイベントであった。

「私は裏表を問わずこの麻帆良の最強が見たイ。故に私はここ最盛期のまほら武道会を復活させるネ！　飛び道具及び刃物の使用禁止、加えて呪文詠唱禁止の２点を守ればいかなる技も使用ＯＫヨ！」

だがしかし、今年度の大会では大きくその事実が払拭される事となる。とある人物が他の複数の武道大会をＭ＆ａｍｐ；Ａする事により、優勝賞金１０００万円という驚愕の値を叩き出していた。

「大会中はこの龍宮神社は完全な電子的措置により記録媒体は使用不可とさせル。よてバレることを恐れず、存分に技を競って欲しイ。諸君らには裏表の力に触れ、己を試し、見聞を広めて欲しいと思ウ！　以上！」

今現在、まほら武道会は歴史だけ無駄にある落ち目のイベントではない。今回の麻帆良祭屈指の大イベントとして、動きを始めようとしていた。

「あぁ、蛇足ではあるがこの大会が形骸化する前、最後の優勝者はふらりと異国から現れた子供。ナギ・スプリングフィールドと名乗る少年だったらしいヨ」

□

第１試合　佐倉愛衣ｖｓ犬上小太郎
第２試合　大豪院ポチｖｓクウネル・サンダース
第３試合　長瀬楓ｖｓ黄剣峰
第４試合　龍宮真名ｖｓ古菲
第５試合　田中ｖｓ高音・Ｄ・グッドマン
第６試合　ネギ・スプリングフィールドｖｓ高畑・Ｔ・タカミチ
第７試合　神楽坂明日菜ｖｓ桜咲刹那
第８試合　エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルｖｓ山下慶一

麻帆良祭二日目。龍宮神社の一室に、１６人と幾人かの人間が集まっていた。この日この場所で、武の腕を競う者たちばかりだ。

「剣峰！　１回戦絶対勝つアル！　んでもって私と勝負アル！」
「お前は相変わらずの戦闘中毒だな」

ぴょんこぴょんことベンチに座る黄の周りを跳ねる少女――古菲に思わず苦笑が浮かぶ。
純粋に、ただ純粋に自分の力を試すために、強さを求める古にこうやって喧嘩を売られるのは黄の日常の１コマだ。

「いつもは戦てくれないアルから、今日はホントーに楽しみアルヨ」
「なんだ、それは既に私に勝つ気な訳かい？」
「拙者も負ける、としてかうんとされているようでござるなぁ」

からかうような視線は古に上から降り注いできた。真名と長身の糸目少女――長瀬楓の登場に、わたわたと古は少し慌てているようだ。

「まぁ冗談だよ」

「あいあい」
「そっ、そうアルかぁ」
でへへへっと笑う古に目を細める真名。その一方で、にこにこと笑顔を作りながらも、楓はじっと黄に視線を注いでいた。探るような視線が黄を覆う。その視線を見返す黄は気付いており、楓もまた気付かれている事に気付いている。だがどこ吹く風で盲目と糸目は見つめ合っていた。
「手加減、してくれるでござるか？」
「お前が手加減してくれたらな」

□

目の前で繰り広げられる異様な光景に、観客はざわざわとささやき合っていた。１５ｍ×１５ｍの特設リングの上、第１試合と第２試合はつつがなく進行した。第１試合は小太郎の勝利で、第２試合はクウネルの勝利で、それぞれと相手を圧倒する戦いっぷりであった。
「得物なしで、お主とはやりにくいでござるなぁ」
「こっちもモノが違うんだ。ちょっとは甘く見てくれや」
特設リングの中央、黄は足を折り正座していた。左脇には一本の木製バット。こんな時でも相変わらず、丸縁帽子を目深に被っている。

時折がいんと、妙な音がする。その度に楓の唇は少しづつ尖がっていった。

「やっぱ居合い、抜刀術や！」
「ばっとうじゅつ？」
「鞘走りにより剣撃を加速させ、初太刀、あるいは二太刀目で相手を制する武術の一つだよ、ぼーや」

首を傾げる馬鹿弟子に、金髪の師匠――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは答えを提示した。

「しかし、いつ見てもあの姿は芸術的だな……美しい」
「なんやあんた、にぃちゃんと知り合いかいな」
「多少、な」

視線を特設リングに向けるエヴァに習い、ネギと小太郎もそちらに顔を向けた。
とんとんと楓が跳ねる。一人は四人となり、そろって唇を尖らせた。

「拙者、遠距離はあんまり得意ではないんでござるよ」
「気が合うな、俺もだ」
「苦無やらがあれば多少は違うんでござろうが」
「俺も出来るなら、使い慣れたもんが良いわ」
「動かないんでござるか？」
「面倒なもんで」
「セコいでござるなぁ」
「四人いる方がセコいだろ」

一寸、誰かがまばたきをした。その時四人の楓は一人の黄を囲む

ように、立っていた。
四つの掌底が十字を描き、空を斬る。
「わぁお……でござる」
「わざわざござるはいらねぇぞ」
黄の声は楓の頭上から聞こえてきた。正座の体勢そのままに、黄はふわりと宙に跳び上がっていた。
ぱちりと、微かな電流が黄の左手を走る。バットは三角に閃き、楓はたった一人となった。
「……むぅ、なるほど」
「納得したか。したならタクシー代でも貰えるか？」
「女に出させるのはマナー違反でござるよ」
距離を取った楓へと再び特設リングで正座する黄。だがくしゃみ一つの後、その身体は楓に近付き、バットの先端は半円を描きかけていた。
ばきりと大きな打撃音がする。
一拍の後、宙を舞ったのは丸縁帽子を押さえる一人の少年。その頭から、彼は特設リングを囲む水の中へと弧を描き入っていった。

□

「麻帆良にこんな下水道があったとは知らなかったよ。何かの研究施設かな？」

『私は機械に詳しくないのでそこまでは……。でも超さん達の部屋の隠し扉から通じていた訳ですし、何らかの関係があることは間違いないですよ』

異臭がいくらか鼻を刺す地下道で、スーツ姿の壮年の男――高畑・T・タカミチは刹那の式紙であるちびせつなと一緒に足を進めていた。

いつもよりタカミチの足は重い。それは先程あったネギとの戦闘で多少なりとも体力を使ったからであろう。憧れの友人、その息子との殴り合い。幼い頃から見てきた小さな少年は、タカミチ自身の認識を驚天動地させるだけの結果を示してくれた。

――子供は大人になっていく。そんなありふれた事実に、少し悲しくなり、それを上回るほどにタカミチは嬉しくなった。

「やれやれ、こんなとこまで来てしまたカ」

「ネギ先生に貰ったダメージは大丈夫ですか？」

「まぁ大丈夫じゃねぇ方が、俺的にはありがたいんだがな」

そんな夢見気分は、三人の少年少女らの声によりかき消された。

「君たちは……」

「私は仕事と、少しだけ気分を発散させるために」

「俺はちょいと不完全燃焼なもんで」

ぎしと、身体は軋みを痛みという形で訴える。

「元担任には申し訳ないが、私には時間がないのダ。学園祭が終わるまで、大人しくしてて貰うヨ」

打開策を生み出すために回転する脳の前で、いつもと変わらぬ少

し胡散臭い笑みを超はタカミチに投げてよこした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3395y/

未来少年少女物語

2011年11月8日06時06分発行